

住まいは幸せに暮らすためにあるのです。

暮らしのここ3

住まいづくりの目的が変わった現在。

生活者であるエンドユーザーは住まいに何を望んでいるのだろう。

我々が考えるその答えは「幸せな暮らし」。

価値観が多様化した現在で尚且つ定義が曖昧な顧客の幸せ感とはどのようなものなのか。

そこでターゲットとする顧客のニーズや想いを探り、

選ばれる住宅会社になるための住まいづくりを一緒に考えていきましょう。

新シリーズ

「住宅建築家として」

前回から住宅建築家として住宅を設計するときに押さえておきたい事項を考えていくことにした。

今回はその1回目。

住宅や住まいには様々な目的や役割があるが、その大きなひとつが「子育てをする場所」なのだろうと思う。自然界では子育てのために“巣”をつくりそこでわが子を大人に育てる。

人間にとっての“巣”が住宅や住まいだとすると子育てに最適な環境を創造していきたい。

最近、気になる話題として佐世保で起きた女子高生殺害解剖事件がある。

以前から犯罪の低年齢化が進んでいるが、今回の事件も「子育て」という視点で何かしら考慮しなければならないことがありそうだ。

今回のこの事件についての詳細な動機や当該加害者の心理状況は今後の捜査にゆだねるしかないが、昔では考えられない事件が増えてきていると感じているのは私だけではないと思う。

少年少女犯罪は、もちろん本人の意識や思考、さらに子育てをする親の接し方や教育方法が重要な犯罪動機になるが、同時に育った環境である住まいも何らかの影響を与えているのではないだろうか。

俗に言われる問題として、子ども部屋の存在や鍵の存在がある。

さらに玄関から子ども部屋までの動線も話題に上がることがある。

住宅一次取得者が住まいづくりを考えると、これらのことを気かけながら間取りを考える人も多いが、これらのことはあまり影響しないのではないかと考えている。

子ども部屋の鍵をどうすればいいのかとか、玄関からの動線をリビング経由にすること以上に、親が親として子育てをしっかりと行える環境づくりを住まいでは考えたい。

最も影響を与えていることのひとつに「核家族化」や「少人数世帯」という現象がある。

さらに生活の内製化による暮らしと地域との距離感の変化が考えられる。

分かりやすく言うと子どもが育っていく過程での「ふれあいの減少」が昔と今の子育て環境を大きく変えてきているのではないかとということである。

大家族で暮らしていた時代では、両親が仕事や用事で子どもとのふれあいが少なくても、祖父母や地域の大人とのふれあいがあり、子どもが育つ過程で大人とのふれあいが多かったので、大人の感覚が自然と身につけていたと考えられる。

それが現在のように両親が仕事に出ていて不在であった場合、祖父母も居なければ近隣との付き合いもなく、子ども達は子どもの感覚や考え方で育ってしまう。

その結果、我慢することや慮ることや客観性などが育たず、常に自分本位で自分の欲求を満たすことしか考えられない大人に育ってしまったのではないだろうか。

さらに核家族化の状態が二世代以上続いてきている現在では、子どもの感覚のまま大人になった親が子育てをする状態になってしまい、子どもが子どもを育てている状況が現在の少年少女犯罪や学校での様々な問題を引き起こしているのではないかと感じている。

成人して社会に出たとき、それまで感じたことのない憤りや怒りを持ったとしても、我慢して働かなければ生活が成り立たず生きて行けないという状況がなくなった今、簡単に仕事をやめてしまい家に引きこもり親に寄生して生きる子どもが増えていることも社会が抱える課題のひとつであろう。

これは豊かになった日本という社会の課題ともいえる現象である。

東日本大震災以降、絆やふれあいという言葉に注目が集まり、家族のあり方、近隣との付き合い方などを見直そうという動きが見られる。

TVドラマや映画、小説やマンガなど様々なメディアでこのテーマに関する提言がなされてきている。この動きは住宅業界にも影響を与え、街づくりや家づくりに「ふれあい」を喚起する提案が盛り込まれることも増えてきたように思う。

孤独感や危機感で単純にふれあいを増やすという取り組みではなく、子どもを大人にするための子育てとして「大人とのふれあい」を増やすことが、現在の様々な少年犯罪を減らす対応につながるのではないだろうか。

すでに子どもが子どもを育てている状況である現在では多くの時間がかかるのかも知れないが、取り組まなければならない課題のひとつなのではないかと思っている。

